

2 野 菜

項 目	作 業 内 容
(1)夏秋野菜 (果菜類)の後 期管理	(今月の作業のポイント) ○夏秋野菜（果菜類）の後期管理 ○いちごの開花期までの管理 ○レタスの育苗・初期管理 ○そらまめの育苗 ○冬春野菜の土づくり ア かん水・追肥 必要なかん水量は夏期に比べると少なくなるが、晴天が続く場合は草勢を見ながら適宜行う。特に、雨よけ栽培では、土壌の乾燥による生育遅延を防ぐため、定期的にかん水する。 また、気温の低下とともに肥料が効きにくくなるので、肥や速効性肥料等を用い、肥切れさせないように注意する。 イ 整枝および摘葉 気温が低下すると生育が緩慢となるので、強い整枝や摘葉は行わず、できるだけ茎葉の確保に努める。 ウ 病虫害防除 草勢の低下に伴い、葉かび病、すすかび病などの病害が多発する恐れがあるので、ほ場をよく観察し、初期防除に努める(写真1)。
(2)いちごの 開花期まで の管理	ア マルチ被覆 頂花房を傷めないために出蕾期までにマルチ被覆を行う。被覆後も温度が高い場合は、マルチの裾を畝の肩まで上げて地温の上昇を防ぐ。 イ ビニル被覆と温度管理 ビニル被覆の時期は、品種や作型、天候等により時期が異なるが、第1次腋花房の花芽分化後、平均気温が16～17℃を下回る頃が被覆の目安となる。おおむね、夜冷・株冷で10月中旬、無冷では10月下旬頃である。被覆直後は、ハウス内温度が上



写真1 左_トマト葉かび病（葉裏）
右_きゅうりべと病

項 目	作 業 内 容
(3)レタスの 育苗・初期管 理	昇しすぎないように換気に注意する。 ウ 本ぽでの炭疽病拡大防止 炭疽病は育苗床からの罹病株の持ち込みによって発病する（写真2）。 このため、本ぽで発見した発病株は速やかに除去し健全株を補植するとともに、薬剤散布を行うなど、新たな感染の防止に努める。 エ 病害虫防除 定植後から出蕾期までは、病害虫の発生の多い時期である。天敵やミツバチへの影響などを考慮のうえ、防除を徹底する。ヨトウムシ類、タバコガ類などに注意し、発生初期の防除を心がける。 ア は種および定植 レタスの発芽適温および生育適温は 15～20℃である。9月下旬～10月上旬に播種すると約4か月で収穫期に達するが、この間の平均気温が1℃高いと収穫期は約1週間早まるとされる。 レタスは好光性種子のため、種子が隠れる程度に薄く覆土する。200穴のセルトレイを用いて播種し、発芽後は徒長を防止するため、日の当たる場所で管理する。かん水は丁寧に行う。 定植苗は本葉3～4枚の若苗を使う。徒長苗や老化苗では活着が悪く、外葉の生育が劣って結球不良となりやすいので注意する。 イ 追肥の施用 生育初期に肥効が不足すると、外葉が充実せず結球が劣るため、初期生育が不良の場合は、本葉10枚頃と結球始期に、液肥や速効性肥料を追肥する。 写真2 炭疽病の萎れ株 (本ぽ)

項 目	作 業 内 容
(4) そらまめの育苗	ア は種時期 そらまめの発芽適温は 20℃前後、生育適温は 15～20℃である。幼苗期（本葉 5～6 枚頃まで）は耐寒性が強いが、生育が進むと寒害を受けやすくなるため、極端な早まきを避け、平坦地では 10 月中旬頃を目安には種する。 イ 育苗 種子消毒されていない種子は、苗立枯病予防のため種子消毒を行う。は種は、「おはぐろ」を下にして種子の 4 分の 3 程度を培土に押し込み、十分かん水した後、新聞紙で被覆し、さらにその上からもかん水を行い、乾燥させないようにする（写真 3）。概ね 1 週間経過し、発芽が揃ったら新聞紙を除去する。以後、土の表面が乾いたらかん水するとともに、薄手の寒冷紗等で覆い、アブラムシ類の飛来を防ぐことにより、モザイク病の発生を予防する。 ウ 本ぼの準備 連作すると、忌地現象やえそモザイク病、立枯病等が多発するので、4 年以上そらまめを作付けしていないほ場に作付けする。作付けほ場には、あらかじめ完熟堆肥や苦土石灰を施し、よく耕うんしておく。基肥には 10 a 当たり成分量で、窒素 8 kg、リン酸 12kg、カリ 10kg を施用し、畝幅 120～140cm、株間 50cm 程度（1 条）で定植できるよう畝立てする。モザイク病の予防には、アブラムシ類を忌避できるシルバーストライプマルチを使用するとよい。 定植の適期は、本葉が 3 枚程度展開した頃であるため、植え遅れののないよう、余裕を持って本ぼを準備する。
(5) 冬春野菜の土づくり	冬春野菜のは種または定植の 2 週間前までに、牛糞堆肥を 2～3 t / 10a、苦土石灰を 80～130kg/10a 施用し十分に混和しておく。また、降雨により畝立て作業が遅れないように、排水溝を設置しておく。



写真 3 そらまめの播種状況

（作成 農林水産研究所）